教育会報

第二号

発行・編集
鹿児島県教頭会
〒892-0836
鹿児島市錦江町
2-16
鹿児島県公立小・中学校
教頭会館県教頭会事務局
TEL
099-226-8268
FAX
099-822-5580

平成25年度を振り返って

副会長　福永　洋治
（鹿児島市立甲南中学校）

二〇一三年は、国内外で自然災害が猛威を振るった一年でした。さまざまな自然災害が避けられない国だからこそ、これまでの経験を教訓にして、いつやってくるかわからない災害に対して十分な備えをしておかなければなりません。児童・生徒が平日の多くの時間を過ごす学校の備えは勿論、いつ、いかなるときでも適切な対応ができるよう防災教育の充実を図っていくことが大切であると思います。

ところで昨年一月に、21世紀の日本にふさわしい教育体制を構築し、教育の再生を実行に移していくため、内閣の最重要課題の一つとして教育改革を推進する「教育再生実行会議」が発足しました。これまで「いじめ問題について」「教育委員会制度の改革について」「大学教育・グローバル人材の育成について」「大学入試改革について」の四つの提言がまとめられ、現在「6・3・3・4制の在り方について」が審議されています。会議の中で「教育再生とは、子供たちが、夢を実現する意志を持って、自分たちの道を歩んでいけるよう手助けするためのものである。子供たちの能力を最大限引き出し、社会に貢献しながら自己実現を図ることにより、一人一人が人生をよりよく生きられる手立てを提供するのが教育の役割であり、それが十分実現できていない状況を改革するのが教育再生である。」と言っています。したがって、私たち教頭も学校の課題の実態把握とその対策に誠意を持って取り組み、子どもや保護者、地域の方々の理解と信頼を得、児童生徒に学ぶ楽しさや分かる喜びを持たせていくよう、その役割を十分に果たすために教育の質の改善と向上に取り組むことが求められていると思います。

さて、平成25年度の第四十七回県教頭会研究大会は第九期全国統一研究主題「豊かな人間性をはぐくむ学校をめざして」の最終年度の研究大会でした。

大会初日は、全体会から始まりました。講演では、姶良市立建昌幼稚園園長（前鹿児島市立田上小学校校長）和田幸一郎先生より「管理職へのメッセージ～教師は行きずりの旅人にあらず～」と題して講演をいただきました。教師としての心構えや教頭として「プロの教師としての使命感をもった教師」「学び続ける教師」「よき社会人としての教師」を育てなければならないこと等、豊かな体験をもとに、実践に裏付けされた具体的なお話をいただきました。

二日目の分科会は、6課題7分科会に分かれて各地区で取り組んできた研究実践を発表し、その内容について活発な協議が行われました。

平成26年度の県教頭会研究主題は、第十期（平成26～28年度）全国統一研究主題と同一「豊かな人間性と創造性を育む学校教育キーワード〈生き抜く力・絆づくり〉」となります。第48回県教頭会研究大会は、5課題7分科会で、各分科会の提言は3本となり、研究体制の構築を推進する年度でもあります。新しい組織や研究体制への移行がスムーズにできるように、会員一人一人の皆様方の御支援や御協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、公務御多用な中、御指導・御助言並びに御協力をいただきました県教育委員会をはじめ、各市町村教育委員会、連合校長協会、関係諸機関の方々に会員一同からお礼を申し上げます。

各地区の活動状況

鹿児島地区（小学校）

鹿児島市立吉野小学校
野網　啓司

一　地区の概要

本地区の教頭会は、鹿児島市の小学校八十校（休校二校を含む）の会員八十五名が、近隣で組織した十二研究班に分かれ、鹿児島市教育委員会の指導のもと研修を推進し、教頭としての資質向上に努めている。

二　活動の状況

年間五回行われる市教頭会の場や各研究班ごとに行われている研修会等で研究を深めている。本年度は、県教頭会研究大会において三つの研究班がそれぞれ「キャリア教育の推進」「教職員の資質向上を図る取組」「学校組織の活性化を図るための取組」について提言を行った。また、それぞれの研究の成果を各学校で実践に活用できるように、毎年、研究紀要にまとめている。

鹿児島地区（中学校）

鹿児島市立谷山北中学校
三原　秀樹

一　地区の概要

本地区中学校部会は、学校数三十九校、会員四十二名で組織され、六ブロックに分かれて研究を行っている。鹿児島市教育委員会の指導のもと研修を行い、教頭としての資質向上に努めている。

二　活動の状況

会員は、年五回実施される市教頭会やその他の研修会の中で、研究課題の解決に向けて取り組んでいる。平成二十五年度

県教頭会研究大会では、これまでの研修の成果を第一A分科会で研究提言、第二・第四分科会で誌上提言として発表することができた。

年度末には、各ブロックの研究成果を「研究紀要」にまとめ、各学校での実践化につなげている。

来年度からは、現在の六ブロックから七ブロックに編成し直し、新たな体制で研究を推進していく予定である。

今後も、お互いの実践を持ち寄り研究を深め、その成果を共有していきたい。

鹿児島郡地区

十島村立悪石島中学校　野本　正樹

一　地区の概要

本地区の教頭会は三島村の四校と十島村の七校の会員数十一名で組織されている。鹿児島教育事務所及び三島村教育委員会、十島村教育委員会の指導を仰ぎながら教頭としての資質能力の向上に努めている。すべての学校が小中併設・極小規模校で地域の特性を生かした特色ある教育活動を実践している。

二　活動の状況

三島村、十島村ともに年四回の研修会をそれぞれ実施し研究課題の解決に向けて取り組んでいる。また、年二回の日置・鹿児島郡地区の研修会も実施されている。

平成二十五年度県教頭会研究大会において、これまで研究していたものを第五分科会において研究提言することができた。

毎年度末、個々の研究実践をまとめた鹿児島郡教頭会研究誌を発行している。今後も離島間の連携を強化しながら、更に研究実践を深めていきたい。

川辺地区

南さつま市立大浦小学校　仮屋　浩一

一　地区の概要

本地区教頭会は、南さつま市、南九州市、指宿市、枕崎市の四市の会員（小学校五十四校、中学校計十九校）で構成され、南薩教育事務所及び各市教育委員会の指導を仰ぎながら、教頭の資質向上に努めている。

二　活動の状況

六月の南薩地区教頭研修会後に、南薩地区教頭会として研修会を実施した。組織の概要や年間計画を確認し、研修会後に情報交換会も開催し親睦を深めた。

各市教頭会では小中一貫教育、コミュニティースクール、インクルーシブ教育、学力向上等について自主研修会を行った。十一月の県教頭会研修会では南九州市教頭会より「児童生徒の夢の実現に向けた教育課程」の提言、指宿市教頭会より「豊かな人間能力育成」に関する提言、南さつま市教頭会より「九カ年のつなぐ教育の推進」に関する提言を行った。会員の取組については、地区教頭研修会誌「教育なんさつ」にまとめている。

また、県教頭研究大会に向けて、五回の自主研修を行い、第二分科会「子どもの発達に関する課題」で共同研究として誌上提言を行った。

さらに、会員それぞれの課題や実践、教頭職としての資質向上を目指しての座談会や研修を行ってきた。

年度末には、個々の実践をまとめ、研究誌「揖宿」としてまとめている。

指宿地区

指宿市立柳田小学校　中村　俊一

一　地区の概要

本地区の教頭会は、小学校十二校、中学校五校、十七名の会員で組織され、南薩教育事務所及び指宿市教育委員会の指導を仰ぎながら研修を推進し、教頭としての資質向上に努めている。

二　活動の状況

年一回の南薩地区教頭研修会と年六回の指宿市教頭研修会において、研究を深め、各学校での取組の充実を図っている。

学力向上や不登校などの生活指導上の問題、後継者育成等についての自主研修会も積極的に開催し、各学校での実践事例の紹介や情報交換等を行いながら共同研究を推進している。本年度はその研究成果を、県教頭会研究大会において「子どもの発達に関する課題」について誌上提言を行った。

また、各会員の実践や取組については年度末に、南薩地区教頭会研究誌「教育なんさつ」にまとめている。

今後も各校の連携を更に密にしつつ、お互いの実践を持ち寄り、共有しながら研究実践を深めていきたい。成果をまとめた地区教頭会研究誌「ひおき」を毎年発行している。

日置地区

日置市立伊集院小学校　大迫　弘樹

一　地区の概要

本地区は、日置市といちき串木野市からなり、会員数は四十名（小学校二十八校、中学校十二校）である。鹿児島教育事務所及び、各市教育委員会の指導を仰ぎながら、教頭としての資質・能力の向上や学校経営や運営の活性化に向けて、研修を重ねている。

二　活動の状況

地区教頭研修会は鹿児島郡地区教頭会と合同で開催され、相互に情報交換を取りながら連携を深めて研修している。

五月の地区研修会では、

①信頼される学校づくり

②これからの教員に求められる資質能力

の二本柱を所長講話よりいただき、各学校においてその実践に努めることとなった。

また、本地区では二市教頭会の下、旧市町を地域とした教頭会が運営されている。各地域研修部長を中心に、それぞれの課題に向けた研究等、実践的に取り組んでいる。

川薩地区

薩摩川内市立朝陽小学校
児玉　猛

一　地区の概要

本地区教頭会は、薩摩川内市及びさつま町の一市一町で構成され、小学校五十校・中学校十九校（休校一校）からなり、会員数六十九名で組織している。

北薩教育事務所及び各市町教育委員会の指導を仰ぎ、教頭としての資質向上を目指して研究に取り組んでいる。

二　活動の状況

地区教頭研修会は五月に実施され、所長講話や教育事務所の重点事項の説明、模擬授業を通したワークショップ型の授業検討会等が行われ、充実した研修会となった。

また、各市町教頭会では、研究グループ毎にそれぞれの現状や課題を踏まえたテーマを設定し、教頭としての関わり方を踏まえながら実践的、主体的な活動を進めることができた。

さらに、県教頭研究大会での発表内容や各研究グループの具体的な取組等を、地区教頭会研究誌「あしたを拓く」にまとめることにより、相互の資質向上を図ってきている。

出水地区

出水市立荘中学校
末留　健太郎

一　地区の概要

本地区は、二市一町から成り、小学校三十三校、中学校十六校である。教頭会には四十九名が所属し、北薩教育事務所及び各市教育委員会の指導を仰ぎながら、教頭としての資質向上に取り組んでいる。

二　活動の状況

1　地区の全体研修

地区教頭研修会は、五月に年一回実施している。内容は、地区教育行政の重点施策に係る指導、関係機関の事業説明、信頼される学校づくりについての研究協議、講演等が行われ、充実した研修会となった。今年度は、県総合教育センター講師によるワークショップの進め方について説明や演習も行った。

2　各市町における研修

各市町の研究テーマや年間計画に基づいて実践を進め、その一端を県教頭会でも発表した。また、年間の研修を研究誌「いずみ」にまとめている。

伊佐地区

伊佐市立平出水小学校
中島　隆洋

一　地区の概要

本地区の教頭会は、伊佐市の小学校十四名、中学校四名の教頭で組織している。

現在、姶良・伊佐教育事務所ならびに伊佐市教育委員会の御指導の下、教頭としての資質向上のための研修や共同テーマ研究・当面の課題等についての研修を行っている。

二　活動の状況

伊佐市教頭会は、『姶良・伊佐地区教頭会』としても活動している。地区教頭研修会は、年二回実施され、相互の情報交換等姶良地区の教頭先生方と連携をとりながら研修を深めている。

伊佐市における教頭研修会では、伊佐市教育委員会と市校長会の御理解の下、教頭会自主研修の時間を十分に確保し実施することができた。

自主研修では、県教頭会研究大会での『小中連携推進』の提言発表に向けた検討・話合いを重ねた。また、当面する諸課題についても、課題意識をもって具体的な情報交換を行うなど、充実した研修を行うことができた。

姶良地区

霧島市立福山中学校
上栗　博文

一　地区の概要

本地区は二市一町で構成され、小学校五十六校・中学校二十一校からなり、会員数七十八名で組織している。

姶良・伊佐教育事務所並びに各市町教育委員会の指導を仰ぎ、教頭としての資質向上を目指して日々研修に努めている。

二　活動の状況

地区教頭研修会は、伊佐地区の教頭先生方と合同で、年二回開催している。五月の研修会では、県・地区の教育行政重点施策に係る指導のほか、職員指導に関するケーススタディやワークショップ型の授業研究等について研修を深めることができた。九月の研修会では、「信頼される学校づくり」をテーマとしたパネルディスカッションやコーチングをテーマとしたソーシャルスキル・トレーニングに取り組み、資質向上に努めた。また、年度末には各市町や学校の研究状況や随想等をまとめた研究誌を発行している。

曽於地区

大崎町立持留小学校
上床　研三

一　地区の概要

曽於地区教頭会は、二市一町からなり、会員数五十五名（小学校四十二名、中学校十三名）で構成されている。大隅教育事務所及び各市町教育委員会の指導の下、教頭としての資質向上やテーマに基づいた研修を進めている。

二　活動の状況

1　大隅地区全体での研修

地区教頭研修

大隅地区全体として年二回（五月と十月）開催された。一回目は「学力向上のための教頭としての取組」と「不登校の未然防止に向けた教頭としての取組」について、二回目は大隅地区最重点施策である「『確かな学力』の定着」と「生徒指導の充実」に対して校長のマニフェストの具現化を図る教頭の取組について、事例発表や演習等を通した実践に結び付く研修を実施した。

2　各市町における研修

本年度の県教頭会研究大会での発表等を通して、また、来年度の発表等に向けて、系統性と継続性のある共同研究に取り組んでいる。

肝属地区

鹿屋市立下名小学校　川﨑　公代

一　地区の概要

肝属地区教頭会は、二市四町の小学校四十九校、中学校二十四校の七十四名（二人配置校一校）で組織している。大隅教育事務所、各市町教育委員会の御指導をいただきながら、校長の学校経営の補佐役としての資質向上を目指し、研修に努めている。

二　活動の状況

1　地区教頭研修会

地区教頭研修会は、五月と十月の年二回開催された。事務所長講話等により県及び地区の教育行政の重点施策等について指導を受けるとともに、研究協議等により喫緊の教育課題解決に向けた実践的研修を深めることができた。

2　各市町における研修

各市町の実態を踏まえたテーマを掲げ、年間計画に従い各学校で具体的な実践を進めた。経過や成果については、毎年発行の地区教頭会誌「教育おおすみ」に掲載している。

熊毛地区

西之表市立古田小学校　久木田　昌之

一　地区の概要

熊毛地区教頭会は、一市三町からなり、小学校三十三校、中学校七校の会員三十九名で組織している。

熊毛教育事務所をはじめ、各市町教育委員会の御指導・サポートのもと、教頭としての資質向上を目指し日々研修に努めている。

二　活動の状況

本地区では、年二回の地区教頭研修会が開催される。第一回（五月）は、県・地区の教育行政重点施策に係る指導の他、基礎学力の定着の方策やう歯治療率の向上、県民週間の活性化のための具体策について協議した。第二回（十月）は、「学力向上を本気で語れる職員室に」という演題で県教育庁義務教育課の上村芳郎先生による講話で研修を深めることができた。

また、各市町においても各学校の実践事例を基に、研修を推進することができた。さらに、県教頭研究大会においては、屋久島町と西之表市教頭会が、「教育環境に関する課題」について、それぞれ提言と誌上提言を行い、充実した研修をすることができた。

大島地区

奄美市立大川小学校　原田　浩一

一　地区の概要

平成二十五年十二月二十五日で奄美群島が日本に復帰して六十周年を迎えた。そのため本年度は各地で様々な記念行事が行われた。

さて、本地区教頭会は、一市九町二村で小学校八十四校、中学校四十九校、会員百十一名で組織されている。大島教育事務所及び各市町村教育委員会の指導を仰ぎながら、教頭としての資質の向上に努めている。

二　活動の状況

1　地区全体での研修

地区教頭研修会は五・九月の二回開催され、事務所長講話を始め、講演や情報交換が行われた。また、研究協議では、ワークショップやポスターセッションが取り入れられ、活発な情報交換をすることができた。

2　研究紀要の発行

市町村ごとに一年間研修したことをまとめ、大島地区小・中学校教頭会研究紀要を発行している。今回は三十二号。各市町村の活動報告に加えて、随想等を載せることで親しみやすい紀要にした。

3　地区代表者会の開催

各市町村代表者が参加し、年間活動の反省と次年度の計画についての協議した。また、奄美の世界自然遺産登録に向けて、講師を招いて講演会・情報交換会を開き、資質向上と組織の充実を図っている。

随想

「輝く島の宝、口之島っ子」

十島村立口之島中学校　高橋　勉

口之島小中学校は、トカラ列島の最北端にあり、鹿児島港を出航して約6時間、村営の船である「フェリーとしま」が最初に到着する島にある。人口は百人程度の小さな島であるが、黒毛和牛の原種ともいわれている野生の牛や夏には、世界でこの島にしか咲いていないタモトユリの島としても有名だ。

この島には、コンビニもなければ、信号機もなく、周りは雄大な自然に囲まれている。現在、中学生が四名、小学生が十一名である。この島のすべてが、子どもたちを生き生きと育ててくれる学校のようでもある。例えば、水泳学習は、リーフの中に作られたプールに始まり、最後は、地元の方々と協力してサンゴ礁のリーフの中に網を仕掛け、魚を追い込んで捕まえる口之島の伝統的な漁法を行う。

また、耕耘機を使って、田んぼや畑を耕し、スイカやトマト、ピーマンなどいろいろな作物を育て、口之島の大地の恵みをおいしくいただくことができる。他にも野生化された牛に出会い、野生の雄々しさを感じ、トカラヤギの出産に立ち会い、生命の慈愛を味わい、世界に口之島にしか咲いていないタモトユリを見て、島を愛する心を育てる。

この島での多くの感動は、十五歳で進学のためには島を離れ、両親のもとから巣立っていく子どもたちに夢と希望を与え、たくましさとやさしさを身につけさせる。今、十五名の子どもたち一人ひとりがかけがいのない絆をつくりながら、泣いたり、笑ったり、そして、心から喜んだりしている。未来の口之島の宝として、さらに光り、輝くことを期待したい。

Recommended Book

『禅が教えてくれる美しい人を作る「所作」の基本』

著者　枡野　俊明
発行所　幻冬舎

指宿市立池田小学校
吉村律子

職員室の掃除をしながら思い出すことがある。「管理職になってしたいことはなんですか。」と聞かれ「職員室をきれいに、笑顔で対応のできる管理職を目指したい。」と意気揚々と答えた任用試験面接のこと。しかし、いつのまにか、日々の仕事に追われ掃除もおろそかになり、背中を丸くしてパソコンに向かい、それが肩や首のこりにつながり、ストレスやイライラの原因になってしまっている。そんなときにこの本と出合った。筆者は、曹洞宗の僧侶(建功寺住職)であり、作庭家でもある。筆者が造る石と白砂だけで構成される枯山水。見るものの心を打つ。

禅は、「行住坐臥」すべてが修行。禅の修行とは私たちの「所作のすべてを整えること」だと、筆者はいう。立ち居振る舞いが整えば、自然と心も整う。心が穏やかであれば、言葉にやさしさや思いやりがにじみ出てくるものである。イライラした人に所作の美しい人はいない。

では、このように所作を整えるためにどうすればよいのか。

・基本姿勢と呼吸を整える

「おばさん」といわせない！美しく生きるために・・・

・所作を整える

〝自分自身と向き合う〟編

〝人や社会と向き合う〟編

・禅の心、日本の美しい心をもっと深く知り、所作を整える

と、具体的な実践が書かれてある。毎日、できることから少しずつおこなうように心がけて生活し、気がついてみるとそれらが、自然と身についている。そんな自分であれば職員室も美しく整い、気持ちよく働けるはず。

忙しいということは、「心」を「亡」くすこと。多忙さのなかで、なお、ゆったりとした時間を持つ自分でありたい。

日本人の美徳といわれた慎ましさや謙虚さ。大切にしたい。そう思わせる一冊である。

Recommended Book

『坂村真民一日一言』

著者　坂村　真民
発行所　致知出版社

西之表市立住吉小学校
中村俊一

師走半ば、今年は出せる喜びを感じつつ年賀はがきを購入した。

ここ数年、喪中欠礼の葉書が増えてきていることもあり、親や親族のことを案ずる年齢域にいるのだと再認識するこのごろである。

ところで、二回目の種子島での生活が始まっている。介護施設に入所する母親への見舞いも、帰省する年二回ほどとなってしまった。ふとした時に母のことを思い浮かべることも多い。

そんな自分に、一言一句、言霊として沁み入るように迫ってきた本を紹介したい。

坂村真民は明治四十二年熊本県に生まれ、四十年間勤めた高校教師を退職後、仏教精神を基調とした詩の創作に全身全霊賭けてきた詩人である。

その坂村真民の全詩集・全著作の中から三百六十六語を選び出し、「一日一言」としてまとめたものがこの本である。

「一日一言」の構成ゆえに、どの日から読んでもよい。

ある日は二・三行。ある日は宇宙。ある日は仏教観。その日その日の言の葉が、「言霊」としてぐいぐい迫ってくる。

念ずれば花ひらく
念ずれば
花ひらく
苦しいとき
母がいつも口にしていた
このことばを
わたしもいつのころからか
となえるようになった
そうしてそのたび
わたしの花がふしぎと
ひとつひとつ
ひらいていった

本ものの道
この道はあきることはない―
あきる道は本ものではない。
この仕事はあきることはない―
あきる仕事は本ものではない。
あきない道だから、あきない仕事だから、いつも新しく、いつも生き生きしている。

教頭として戸惑うことも相変わらずだが、この道をさらに力強く歩んでいきたい。

新任教頭雑感

宮　明久
瀬戸内町立池地小中学校

本校は、大島郡瀬戸内町の加計呂間島から更に南の請島にある小中併設校である。全校児童生徒数は四名で、一島一校の極小規模校でもある。

そんな本校へ赴任したのは昨年の四月。朝から雨の降る風の強い日だった。古仁屋の役場にて辞令交付を終え、向かった港の片隅にポツンと置かれていたのは数日前に前住宅から運ばれてきたコンテナである。ここからどうやって請島まで運ぶのか。不思議な面持ちで眺めていると、先ほど合流した本校職員から、「今からそこの海上タクシーに積み換えます。」の一言。そこからはもう言われるがまま、指示された通りにコンテナから荷物を移し換え、気がつくと、荷物いっぱいになった海上タクシーに同乗し、しけの海を加計呂間の横を飛び跳ねながら進んでいた。私の着任一日目は、そんな怒濤の流れの中で過ぎていった。

それから九ヶ月余り。初日の慌ただしい流れのまま現在まで来た気がする。当然だが初めての教頭職で、覚えなければならない事柄も半端ではない。そんな日々にあって思い返すのは、あの着任の日である。当日は混乱していて気づかなかったが、入島式後、現住宅への荷入れをしていただいたのは、その後も大変お世話になり行事へも多大な協力をいただいている島の方々だった。そして請島の大切な四名の子どもたち。あの日、私を見つめていた彼らの目は新しい教頭先生はどんなだろうという期待の眼差しだったあの時の子どもたちに自分は何かを返すことができているだろうか。その思いを忘れることなく、常に児童生徒を第一に考える教頭でありたい。

原口　隆司
鹿屋市立祓川小学校

本校は、鹿屋市郊外にあり高隈山系と笠之原台地に囲まれた児童数六十名ほどの小規模校です。近くに農村地帯が広がる自然豊かな地域です。

さて、私の勝手な考えですが、自分の人生は八年周期で大きく変化していて、一周期目の八年間は会社員生活。次の二・三周期目の十六年間は教諭生活。そして、今が四周期目ということになります。

その四周期目も一年が過ぎ、振り返ると、学級担任をしていた十二月に突然の異動辞令があり、戸惑い、気持ちの整理もつかないままの赴任でした。不安な気持ちの中、心強かったのは、近くの学校や本校前任の教頭先生の存在でした。特に、前任の教頭先生には、毎日のように事細かく聞き、教えてもらい、携帯電話の履歴には恋人なのかと勘違いするぐらい前任の教頭先生のお名前が並んでいました。ご自身も新しい学校でお忙しいのに、毎回、丁寧に教えてくださり、なんとか教頭の業務を進めることができました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。まだまだ、仕事は半人前ですが、誠心誠意取り組んでいきます。

先日、教え子の二十歳の同窓会に呼ばれました。久しぶりに会った教え子たちは、小学校卒業後の八年間で、面影を残しながらも大きく成長し、夢の実現に向け一生懸命に努力していました。決意新たな若者の笑顔はすがすがしく感じ、教師としての喜びを再確認できました。

今後の四周期目に出会う子どもたちや先生方にどんなことができるのか。八年後に、教師としての喜びを再確認できるよう、日々の業務に取り組んでいきます。

自由題

特色ある活動あれやこれや

日置市立伊作小学校　鎌田 浩希

本校の特色ある教育活動として、日本三大砂丘である吹上浜の美しい自然に触れ、そこに産卵に来るウミガメを保護する活動がある。ウミガメのふ化や放流に毎年取り組み、七月には保護啓発活動の一環として全校児童で「かめさん祭り」を実施している。昭和六十三年から続くこの取組が認められ、平成二十三年度に環境省自然環境局長賞の表彰を受けている。

「かめさん祭り」では、全校児童がウミガメクイズにチャレンジしたり、ウミガメパトロール隊員の話を伺ったりする。その後、手作りのプラカードや横断幕、大うちわを持ち、お面などを頭に乗せて、ウミガメ保護や吹上浜の環境保全を訴えながら、商店街を行進する。途中、地元の「吹上音頭」も数回踊る。

テレビや全国版の教育誌、機関誌、各新聞にも採り上げていただいている活動である。

しかし、本校は、島津氏中興の祖といわれる島津忠良（日新公）の生誕地にある学校であり、「日新公いろは歌」の精神を教育の基盤としている一四四年の歴史と伝統を有する学校である。校区内には島津家ゆかりの史跡も点在する。

更には、さつま湖や吹上温泉郷等もあり豊かな自然など地域素材に恵まれた環境にある。

どう生かして充実させ効果を上げるか、特色ある活動の柱にしたいものが多すぎて困るぜいたくな悩みである。

地域の宝を発掘するということとして

南さつま市立大浦小学校　仮屋 浩一

本校は広々とした大浦干拓を目前にした処に位置する学校である。大浦の稲作は早期米であるために、6月には田は青々と茂り、その緑が初夏の青空に映え、何とも清々しい気持ちになる。また、冬には特産の大浦ポンカンで、スーパー、商店の店先がオレンジ色に彩られる。大浦町の地図を見ると、今ある田畑は昔遠浅の海であったことが容易に想像できる。学校の石垣も干拓前の堤防であった。干拓地の真ん中にある小高い展望台はその昔島であったことなど、調べてみると実に興味深い。しかし、残念なことに、そんな地域の特色が意外と教材化されていないのである。これは前任校でも同様のことが言えた。おそらく教師自身が地域をよく知らないことに要因があるように思う。私は地域の人との懇親会があれば、必ず地域のことを尋ねることにしている。地域の行事があれば行って見てみる。すると、地域の古老は、すぐにいろいろなことを教えてくれる。「なるほどなあ。」「おもしろいなあ。」と思うことばかりである。それを学校で言うと、在職六年目の職員が感心する。私は二年目、彼は六年目である。いかに地域のことを知らないかが分かり、あきれることもある。これでは目の前にすばらしい宝があっても、教材化されるはずもない。

今年、ある先生が学校にポンカンを大量に持ってきた。「どうしたの？」と尋ねると、児童の祖母から頂いたということであった。さらに追求してみると、少し恥ずかしそうに「実は先週誘われて保護者の家でポンカンの収穫を手伝った。」と答えた。誘ってくれた保護者にも、行った先生にも感謝の気持ちでいっぱいになった。きっとこの先生は、大浦はポンカンが有名で、こんなふうに栽培しているんだよと、大浦ポンカンのことを子どもたちに伝えてくれたと思う。その先生の担任する学級の今年度の学習発表会での演目は、「大浦干拓の歴史」であった。干拓工事が地域の人のどのような思いで始まったのか、どのような苦労があったのかを故郷の自然のすばらしさも交えながら、子どもたちは伸び伸びと発表した。

本校は、校区内に居住しているのは管理職のみである。しかし気持ちだけでも、地域に根を下ろし、地域のことを肌で感じてほしいということを職員に伝えたい。地域の宝を掘り起こすには、まずは地域に興味を持ち、地域を知ることが大切である。